

## 婚約後始めての大河原駅で

昭和二十五年夏、釜石で休養の為下船平沢の生家に帰った。父の目になつた十九才の、なかと婚約した。一ヶ月位休みがあつたので、兄雄一郎が復員の時連れて来た軍馬桜正に乗つて会いに行き、白石七夕祭りには、なかの妹、よき子、私の妹隆子、それに仲人して戴く方の娘さんと五人して見物に行き婚前写真を撮つた。

仙台に二人して出掛け映画を見て、月のきれいな田舎の夜道を寸暇を惜しむ如くゆっくり矢附に送り届け、泊まって行きなさいと云われたが、約五キロの夜道をトボトボと歩いて生家に帰つた事を思い出す。

休みも終わりに近く、釜石に帰らなければならぬ。結婚後であれば一緒に船まで帰るのだが、婚前交際である。又の逢瀬を楽しみに一時の別れである。

約三〇分歩きバスに乗り大河原で列車に乗る。大河原駅は鈍行列車しか止まらないし、停車時間も長い。

時間が近づきホームに入った、それまで顔を見合せて話していたのに、列車がホームに入つて来たら、背中を向けて下を見ている。

列車に乗り発車のベルが鳴るまでそのままだったが、ベルが鳴りやみ発車が近づいてから、やっと顔を見せ手を振ってくれた。あの光景が今でも思い出される。

